

年中行事における子どもの遊び生活

—— 江戸期を中心として ——

蛭 田 道 春

子どもの遊びには、年中行事型、自然とのふれあい型、集団（仲間遊び型）、道具活用型などがあげられる。

年中行事型は、正月、初午、桃・端午の節句、祭り、七夕、十五夜などである。日本と西欧との違いは、日本では、西欧と比較して季節感が明確で春夏秋冬の季節が自ずと日本人の意識に季節意識をもたらしている。稲作を主要とした国では、人々の生活が季節に直轄していたので、年中行事がおこなわれるようになった。例えば、地方によって異なるが、1月 正月 2月 初午 3月 桃の節句 4月 花まつり 5月 端午の節句 7月 七夕 8月 お盆 9月 菊見 10月 月見 11月 えびす講 12月 お西さま などがあげられる。

自然とのふれあい型には、つり、魚とり、せみとり、お花摘み、蛭狩りなどが、集団遊びは、鬼ごっこ、戦ごっこ、子をとり子とろ、そして、道具活用型には、のぞきからくり、仕掛け絵、かるた、羽根突き、すごろく、めんこ、投扇興などがある。

子どもと年中行事に関する従来の研究をみると、錦絵・絵本などに示された子どもの遊びの紹介や研究がなされている。また、年中行事と子供に関する個々の研究があげられ、そこでは、年中行事の教育性の指摘がなされているが、記述的な資料に基づくものが多い。それらの研究として、县市町村の教育史、特定の研究テーマに基づくものをあげることができる。

本研究では、江戸期の各地方の地誌に描かれた子どもの遊び生活、子どもの遊び生活のみを扱った絵本、俳句にみられる子どもの遊び生活、掛け軸や巻物に描かれた子どもの遊び生活の資料を中心に考察するものである。つまり、これらの資料に描かれた子どもの遊び生活は当時の状況を実際に伝えていると考えられるからである。また、掛け軸や巻物は視聴覚的資料であるので各家庭で常に見られていたものである、その意味で教育的意味が強いと思われる。

この伝統的教育の意味合いについて、民俗学者の宮本常一は次の様に指摘している¹⁾。

「……その村における生活習慣や家庭の事情に暗

いことにあるのを知った。子供の性癖や嗜好すなわち個性といわれるものは先天的なものもあるけれども、その村の生活や家風によるもの、云いかえれば家及び生活の反映によちよるものもまた多いのである。……」

近代以降においても伝統的教育形態は存続しており、その意味で江戸期の子どもの遊び生活を究明することは重要である。

I. 年中行事の教育的意義²⁾

年中行事の教育的重要性について当時の教育家が指摘している。ここでは、貝原益軒と大原幽学、その他教育家の諸文献をあげてみる。

貝原益軒は「和俗童子訓」³⁾の中で、「心の養生と身の養生とは一体」とをあげ、心身の重要性を示している。その行事の一例として、朝・夕の衛生行事の必要性を説いている。朝の衛生行事として、「牙齒をみがき、目を洗う法、朝ごとに、まず熱湯にて目を洗ひあたため、鼻中をきよめ、次に温湯にて口をすすぎ、昨日よりの牙齒の滯を吐きすて、ほしてかはける塩を用ひて、……次に手と目をあらひ……」ことであると。

そして食後の衛生行事として「……食しおはるごとに、手を以て、面をすり、腹をなで、津液を流通すべし」と述べている。

また、正月、端午などの行事の遊びの是非についての在り様を述べている。

「小児の時、紙鳶をあげ破魔弓を射、狛をまはし、毬打の玉をうち、てまりをつき、端午に旗人形をたつる。女兒の羽子をつき、あまがつ（天兒）をいだし、ひいな（雛）をもてあそぶの類は、只いとけなき時、このめるはかなきたはふれにて、年やうやく長じて後は、必ずすたるものなれば、心術におみて害なし。大やう其このみにまかすべし。されど、ついゑ多く、かざりすぎし、……」

さらに、礼の重要性について述べている。

「礼は天地のつねにして、人の則也。即ち人の作法をいへり。礼なければ、人間の作法にあらず。禽獣に同じ。故に幼より、礼をつつしみて守るべし。人のわざ、ことごとに皆礼あり。……小児の時より和礼の法にしたがひて、立居ふるまひ、飲食、酒茶の礼、拝礼などおしゆべし。」

一人前としての成長の証である元服式の必要度を展開する。

「二十歳、いにしえ、もろこしには、二十にして、冠をくはふと云。……元服を加へざる内は、猶わらんべ也。元服すれば、成人の道これより備はる。これより幼小なる時の心をすてて、成人の徳にしたがひ、ひろくまなび、あつく行ふべし。……音」

大原幽学は、「自然—（社会環境）のもつ教育的な意味を重要視」して、「其の士々々の形気の風（微味幽玄考一下）」⁴⁾を注視している。

例えば、「人々の志には従ひ、自分勝手は一生の恥と思ふべし。（心得草 尤も生涯可定之）」とまで言い切っている。そして、幽学は、天地の和の一元論の幽学 道友との交わりを重視する。 道が人とのかわりであると主張する。

- ・我れ一人切るにて外にかまわぬを道ちいはず、人と人との相対して行くが即ち道なり（聞書集三）
- ・誠は我れ一人にて成る者に非ず。所謂人に渡りて以て成る者なり（微味幽玄考三）

この人とのかわりの重視は、その例としてまず、「男の心得」の中の五節句の式に見られる。

- ・五節句は、節々の替る度毎に、猶又其志を愈々正敷よそ毎に趨らざる為めの式日なり
- 兄弟・朋友の交りは、父母の大事、其家を守り、其身を保つ正實を失わざる為なる事

また、「元服了簡定」として、示されている。

- 一 男一人と成ては、親の名代をも勤めるを以て、正しき行ひを以て諸人に帰伏せらるべき徳を積始める事。
 - 一 男の口より出たる事は、反故にならぬ事
 - 一 上達するもおちぶれるも、元服に定まる事
- 以下略

その他、次の諸文献からも、年中行事の教育的意味合いが述べられている。

小児必要養育草（香月牛山 元禄十六年）⁵⁾ には、子どもの遊び生活の教育的な意味について述べてい

る。まず、正月の遊びの意義が記されている。

- ・毎年正月に、四民共に、男の子に破魔弓をもてあそばしめて弓射る事を知らしむるなり。……いま男子をして、破魔弓を持ちて、駆け廻り駆けはしむれば、熱ももれ、病なく、歩行健やかならしむの医なるべし。

また、同書に、基本的生活習慣の必要性、重要性が指摘されている。

- ・朝には、早く起きて、楊枝をもて口中をみがき、手あらい、口そそぎ、髪ゆい、手水をつかいて、卓に向かふべし。

さらに、基本的生活習慣の必要性、重要性が指摘されている。

- ・朝には、早く起きて、楊枝をもて口中をみがき、手あらい、口そそぎ、髪ゆい、手水をつかいて、卓に向かふべし。

「撫育草」（脇坂義堂 享和三年）⁶⁾、「前訓」（手島堵庵 安永年間）⁷⁾ などには、神仏への祈りをあげ、精神的生活の意義と重要性が記されている。

撫育草（脇坂義堂 享和三年）

- ・朝夕に神と仏を礼拝し、つぎにこころでなさるべし。

前訓

- ・神仏の御供えものは疎かにせまじ事なり。
- ・朝お昼なり候わば、手水を御つかいなされ候て、まず神様を御拝みなさるべし。

「幼君輔佐の心得」（稲葉廷斎 元文元年）⁸⁾ では、人々との交流・養生を重視している。

- ・幼君は、ただ常に善き人におおく交わるを第一の教えとす。
- ・養生の方、飲食を節にし、気血流通するをよとす。

II. 年中行事と子どもの遊び生活

1. 地誌にみられる年中行事と子ども

「年中行事記」「歳時記」などに子どもの遊び絵や記述がある。それらは、祭り、神楽、御忌などであるが、子どもにかかわりのある行事を図や記事にあげられているので示してみる。

諸国図会年中行事大成 文化三年 速水春暁齋画図
浪華 群玉堂製本

正月之部 元三市街之図 千寿万歳 爆竹之図
二月之部 雛店夜の景 雛市

三月之部 闘鶏の図 嵐山賞花図
 四月之部 灌仏之図 端午飾人形店開
 五月之部 市井葦菖蒲図 印地打 石山蛭狩之図
 六月夏越祓之図

東都歳時記 齊藤月岑 天保九年
 須原屋茂兵衛・伊兵衛合梓

一月

元日 屠蘇 松の内
 三河万歳 鬼子母神参

二月

初午

三月

女子雛遊び

四月

灌佛会 胃人形菖蒲刀幟の市立

五月

端午御祝儀。諸侯御登城。端午市井図 諸人菖蒲
 湯に浴す。蛭（景物）

六月

小柄原牛頭天王祭礼 神田社地天王二の宮祭礼
 浅草御蔵前牛頭天王祭礼
 浅草鳥越明神祭礼 亀戸香取太神宮祭礼 永田馬
 場日吉山王権現社御祭礼
 赤坂氷川明神祭礼 浅草三社権現祭礼 橋場牛
 頭天王祭礼 隅田川水神社祭礼
 六郷八幡宮祭礼 河崎三王権現祭礼 吾妻森
 吾妻権現祭礼 四谷天王稲荷祭礼
 駒込片町大園寺秋葉社祭礼 戸田羽黒山権現祭礼
 亀戸天満宮名越神事
 南八町堀伊雑皇太神宮祭礼 南品川諏訪社祭礼
 牽牛花（往還、朝顔鉢植売ありく） 虫売縁日ご
 とに出る

七月

七夕御祝儀 亀戸天満宮七夕和歌連歌会
 精霊祭（盆中） 王子権現祭礼

八月

八幡宮祭礼 氷川明神祭礼 亀戸天満宮祭礼

九月

重陽御祝儀 諸侯御登城 三田春日明神祭礼
 目黒大鳥明神祭礼・相撲興行 高田水稻稲荷祭礼
 小石川氷川明神祭礼 高輪高山稲荷祭礼
 神田明神祭礼 千住小柄原飛鳥明神祭礼
 牛込築土明神祭礼 音羽町田中八幡宮祭礼
 平塚明神祭礼 飯倉神明宮祭礼 駒込神明社祭礼

橋場朝日神明宮祭礼 牛込赤城明神祭礼
 （以下祭礼略）

三芝居顔見の世界 看月（月宴）

川崎山王宮相撲興行 戸越村八幡宮祭相撲興行

十月

湯島天満宮祭礼

十一月

嬰兒宮参 髪置（三歳男女）袴着（五歳男子）
 帯解（七歳女子）

当月より三春の間、小児紙鳶をあげて戯とす。関
 東の方言にはたこといふ。

十二月

節分 三芝居千秋楽 年の市

江戸府内絵本風俗往来 菊池貫一郎著 東陽堂 明
 治三十八年十二月二十五日

（絵本江戸風俗往来 菊池貫一郎著 鈴木棠三編
 東洋文庫五十 平凡社 昭和四十年）

正月

屠蘇を汲み雑煮を祝う
 辻店の紙鳶売
 男子の紙鳶遊び 女子の羽根遊び 獅子舞
 手習師匠の吉書
 御殿の幼女正月の遊び 歌牌留多遊び

二月

市中の初午祭 十軒店雛人形市

三月

上巳節句前の売り物並びに節句使
 上巳節句の礼者 花見（上野 飛鳥山 墨田堤）
 潮干狩

四月

灌佛 五月端午の進物並に売物 菖蒲売

五月

端午 蛭 風鈴売

六月

笹団子 子供手習始め じゃん拳
 子をとろ子とろ お山の小山のおこんさん
 蓮華の花は開いた 鬼ごっこ いも虫ころころ
 虫干 花出し 樽御輿 子供遊びの煙火

七月

七夕 精霊棚 魂迎 ぼんぼん（さあのや 遠国）

八月

十五夜

九月

重用の節句 聞見

十月

紅葉狩 お十夜 恵比寿講 勸進相撲

十一月

七五三の祝

十二月

焼芋 煤払 年の市 門松飾り 柊壳

今様十二月絵 江戸後期 甘泉堂版 一雄斎国
芳画

一月 たこあげ

二月 いなりまつり

三月 桃の節句 ひなまつり

四月 花祭り

五月 しょうぶうち

六月 夏祭り

七月 七夕

八月 十五夜

九月 重陽の節句

十月 恵比寿講

十一月 袴着

十二月 まつかざり

以上、「地誌」関係の資料には、数多くの子どもの遊びが見出される。それらは、「地誌」であるからこそ、子どもと年中行事との関係が密接であることが考察される。

2. 俳句にみられる年中行事とこども

次の俳句の内容から、季節と子どもとのかかわりを見ることによって、近世の子どもの生活の一端がうかがえるのでしめしてみる。

小林一茶

(新訂一茶俳句集 丸山一彦校注 岩波文庫より)

正月の子供に成りて見たき哉 寛政9年 正月

蓬萊に南無〜という童哉 文化8年

※蓬萊……正月を祝う飾りもの

初空へさし出す獅子の首哉 文化8年 正月

せき候や七尺去って小セキ候 文化9年 ……

※せき候……歳末の物乞い。歌い踊り、新年の祝言葉を述べて歩いた。

山寺や翌そる児の几巾 文化10年

※几巾 (いかのぼり)

疱瘡のさんだらぼしへ蛙哉 文化10年

あの月をとってくれと泣子哉 文化10年

※あの月 (名月)

せき候にけられ給うな迹の児 文化10年

※亦……後なる子

ちりめんの狙を抱く子よ丸雪ちる

文化10年

ちりめんの狙……縮緬の布で猿のかたちに縫ったもの

妹は子は餅負ふ程に成にけり 文化10年

※餅負う……鏡もちを子どもが背負う

雪とけて村一ぱいの子ども哉 文化10年

御雛をしゃぶりたがりて這子哉 文化11年

子宝が蚯蚓のたるぞ梶の葉に 文化11年

※梶の葉……七夕の夜、梶の葉に歌を書いた。

※蚯蚓……みみず

妹が子やじくねた形りてよぶ蛭 文化12年

小坊主や袂の中の蟬の声 文化12年

里神楽懐の子も手をたゝく 文化12年

寝たいやらかぶりふりけり几巾 文化13年

里の子が犬に付たるさ苗哉 文化13年

わんぱくや縛れながらよぶ蛭 文化13年

リンリンと風上りけり青田原 文化13年

どんど焼どんどゝ雪の降りにけり

文政元 (1434) 年

鬼打の豆ににて立子哉 文政元年

雀の子そこのけそのけ〜 お馬が通る

文政二年

初瓜を引とらまいて寝た子哉 文政二年

妹の子のせおふたなりや配り餅 文政二年

暑き日に面は手習した子かな 文政二年

麦秋や子を負いながらいはし売 文政二年

松尾芭蕉

(芭蕉俳句集 中村俊定校注 岩波文庫より)

元禄四年

祖父親其子の庭や柿みかん

祖父と親その子の庭や柿みかん

元禄四年

つかみ合ふ子共のたけや麦ばたけ

元禄六年

子ども等よ昼顔咲きぬ瓜むかん

いざ子共晝咲かば瓜むかん

いざ子共ひるがほ咲ぬ瓜むかん

以上俳句には、正月、節分、七夕、神楽、十五夜、ひな祭りなど、四季折々の子どもの生活が見られる。

3. 寺子屋の子どもの生活にみられる年中行事

江戸期の寺子屋は、村の生活と密着していた。埼玉県の寺子屋師匠の日記「玉松堂日記」(安政4～6年)から寺子屋の休みをあげたのが表である。村の年中行事がある時に、寺子屋が休みになっている。このことは、寺子屋が村の生活と密着していることわ語っている。村の年中行事の日に寺子屋が休みになっていることから、地域の子ども集団の行事のある時に寺子屋は休みであったと推定する。つまり、寺子屋と地域の子ども集団と結びついている。

表 寺子屋、玉松堂の休みの日

全体	12月15日～10日 年末年始	1月15、16日 小正月・やふいり	1月20日 二十日正月	1月25日 天神講	2月12日 初午	3月3日 ひな祭り
半休	3月17日 聖天祭	5月5日 端午	7月1日 すずはき	7月13日～16日 お盆	8月1日 八朔	9月19日 日待
臨時休	1月11日	1月24日 天神講の準備	3月16日 宵宮	4月8日 花まつり	5月26日 天道祭	7月25日、26日 虫送り
	9月9日 重陽の日	2月と8月の 彼岸の入、中日、二百十日、初伏、中伏、土用の入、山開き				
	雨ごい、かぐら、すもう					

注1. 埼玉県教育史資料、寺子屋玉松堂日記より作成。(安政4～6年)

947 × 332mm

子どもが七夕の笹だけをもっていることから、その時代の特徴が伺える。

⑧かまどの大祓図 英一笑¹⁴⁾ 絹本 江戸後期

300 × 313mm

年末の大掃除のときの大祓図である。

⑨年中行事 山口素絢¹⁵⁾ 画帖 江戸中期

次の年中行事がうまく子どもの遊び生活が描かれている。

5月 節句ののぼり 6月 なつまつり

7月 七夕 8月 夕涼み 9月 まつたけとり

10月 お茶会 11月 7.5.3こどもの

12月 すず払い

それぞれの作品から、子どもが必ず何らかの関係で描かれていることは、年中行事に関わりのある子どもの生活が伺える。

Ⅲ. 掛け軸にみられる年中行事と子ども

①唐子と桃 陶梅里⁹⁾ 江戸中期 絹本

585 × 334mm

広辞苑によると、桃は「古くから日本に栽培、邪気を払う力があるとされた」とある。このことから、子どもの健康・安全を祈ったものであろう。

②五節句 高隆古¹⁰⁾ 江戸後期 絹本

450 × 741mm

五節句という一年の年中行事を描いている。風俗画と南画をとをもった浮世絵風である。

③江戸風俗図絵巻 無落款 卷子本 江戸中期

1523 × 325mm

人形遣いや遊芸人をみている子どもが見うけられる。また、町衆による町の運営、火災避けの組織づくりができてきた雰囲気がうかがえる。

④菊節句風俗図 絹本 無落款 江戸中期

214 × 280mm

菊のだし、こどもののりものが示されている。

⑤五月節句 3代広重¹¹⁾ 絹本 幕末・明治初期

813 × 339mm

⑥七夕図 鎌田巖松¹²⁾ 絹本 江戸後期

984 × 342mm

⑦七夕 長沢芦洲¹³⁾ 絹本 江戸後期

まとめ

以上のように、年中行事と子どもの生活は、非常に密着していたことが理解される。それぞれの地域共同体での生活によってこどもは育まれていた。

近代になって、子どもの生活が学校の普及によって、年中行事への子どもの参加が学校行事以外の時間に変化し、また年中行事のあり方も変化してくると、子どもと年中行事との結びつきは薄くなってしまふ。

今後の研究としては、各々の年中行事に関しては、具体的な子どもの遊び機能、掛け軸に示された美術史的研究、年代別の実証的研究などがあげられる。

註

1) [家郷の訓] 宮本常一著 岩波文庫

2) 各年中行事の意味を広辞苑から確認してみる。

初午

二月初の午の日。

天神講

菅原道真の命日。毎月二五日または毎年二月二五に行われる天満宮の祭。

花見

花をみてあそびたのしむこと。

花逍遥、観花、観桜

桃に節句

三月三日の節句をいう。上巳

雛祭

三月三日の上巳の節句に、女兒のある家で幸福・成長を祈って雛壇を設けて雛人形を飾り、調度品を具え、菱餅・白酒・桃の花などを供える祭。雛遊び。

灌仏会

四月八日に釈尊の降誕を祝して行う法会。花で飾った小堂(花御堂)を作り、水盤に釈尊の像(生仏)を安置し、参詣者は、小柄杓で甘茶(正しくは五隆の香水)を釈尊像の頭上にそそぎ、またもち帰って飲む。

端午

古来、邪気を払うため菖蒲や蓬を軒に挿し、粽や柏餅を食べる。菖蒲や尚武の音通もあって、近世以降は男子の節句とされ、甲冑・武者人形などを飾り、庭前に幟旗や鯉幟等を』立てて男子の成長を祝う。

宮参り

神社に参詣すること。子供が生まれて後、初めて産土(うぶすな)の神に参詣すること。

七夕

五節句の一。天の川の兩岸にある牽牛星と織女星とが年に一度相会するという、七月七日の夜。星を祭る年中行事。

重陽

五節句の一。陰暦九月九日で、中国では、登高という丘に登る行楽の行事がある。日本では奈良時代より宮中で寒菊の宴が催された。菊の節句。

花祭

紅葉狩

山野に紅葉をたづねて鑑賞すること。

- 3) 「養生訓・和俗童子訓」 貝原益軒著 石川謙校訂 岩波文庫
- 4) 「二宮尊徳・大原幽学集 世界教育宝典 日本教育編」 下程勇吉 久木幸男校注 玉川大学出版部 昭和四十一年二月 218 頁～219 頁
- 「大原幽学全集」 千葉教育会 昭和 18 年再版
- 5) 「子育ての書」 1. 2. 山住正巳他編注者 平凡社 昭和五十一年二月
- 6) 同上
- 7) 同上
- 8) 同上
- 9) 陶梅理

寺島氏、名は酉一に卯 字は仲巳、江戸本所中の郷に住し、瓦師を業とす、……

壮年の時、家業を其の子に譲り、別居に閑居し、常に画事を娯とす、……寛政十年六月二十八日没す、本所中郷成就寺に葬る。

(日本書家辞典 人名編 澤田章編 思文閣出版 昭和六十二年六月以下人名については、同書による。)

10) 高隆古(高久隆古)

姓は川勝、通称斧四郎、字は術迹、梅斎、無道々者と号し、……、奥州(白河)の人(一つ下野の人)、……高久靄崖没して嗣なし、其家を継ぎ、後故ありて去る、……初め画を依田竹谷に学び、……中年田中訥言を慕ひ、之に師事せんと欲し、京に上る、至れば即ち

訥言已に没す、乃ち渡邊清、浮田一恵等に拠りて図画の旧式を問ひ、終に鳥羽覚融の風に拠りて一様の画風を起す……後に名声を得て世に鳴る 安政六年八月二十六日没す 年五十九

11) 3代 広重

浮世絵師 一代広重の門人にして初め重寅といい、後に重政と称す。父は江戸深川の船大工なり、二代広重の師家を出づるや、重政代りて師家を継ぎ、二代広重と称す、実は三代なり。専ら錦絵山水を画く、二代に及ばざるところ遠しといへども諸国名産画の如き稍々を見る。足るべし。明治二十七年三月一日没す。

12) 蒲田巖松

名は子寛、秀一と号す。大阪の人、森祖仙に学びて巧に禽獣を画く後中井潤藍江に就て人物山水花鳥を能くす。安政六年七月二十八日没す、年六十二

13) 長沢芦洲

画家。名は麟、字は吞江。号は南暁。長沢芦雪の子。人物画・花鳥画を能くした。弘化四年没

14) 英一笑

高崇溪の次男にして、一珪の養子となり、遂に英一笑と称す。安政五年八月十二月没す。年五十五

15) 山口素絢

字は伯後、山斎と号す。通称竹次郎。京都の人なり、画を丸山応挙に学びて秘訣を得、又我が邦俗の婦女、及び雑画に巧なり、文政元年十月二十四日没す。年六十



①唐子と桃（陶梅里）



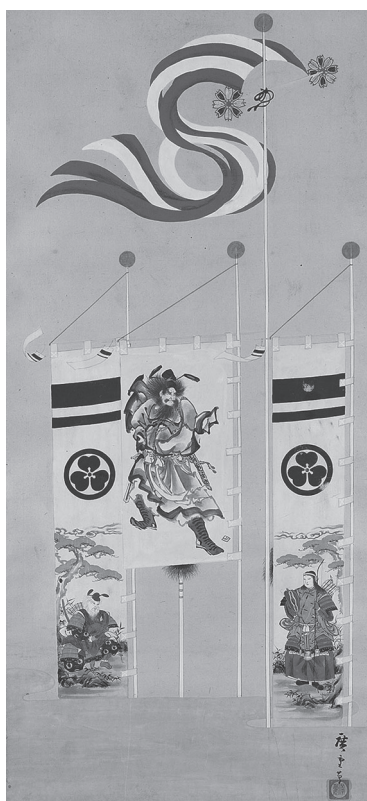
②五節句（高隆古）



③江戸風俗図絵巻（無落款）



④ 菊節句風俗図（無落款）



⑤ 五月節句（3代広重）



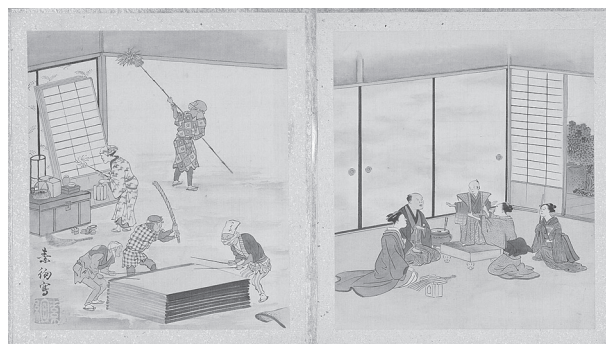
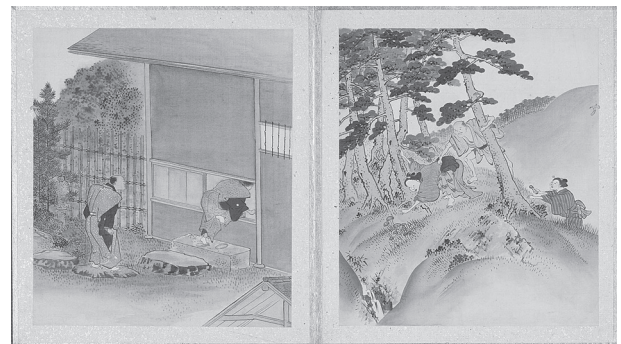
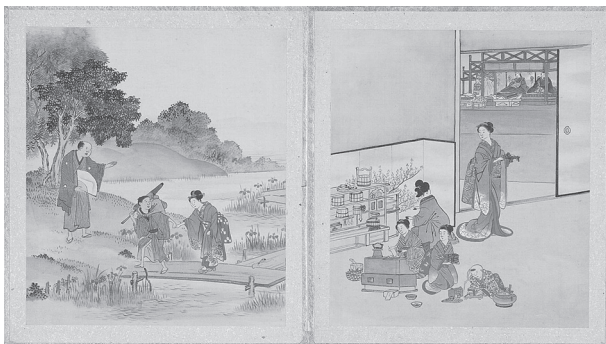
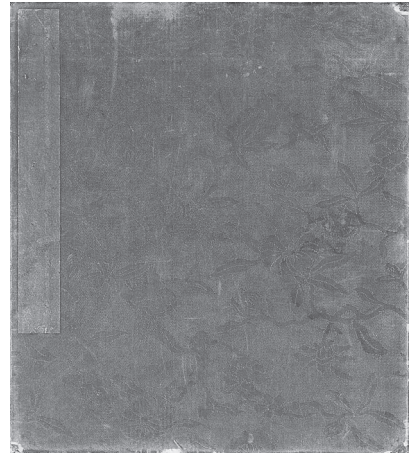
⑥ 七夕図（鎌田巖松）



⑦ 七夕（長沢芦洲）



⑧かまどの大祓図（英一笑）



⑨年中行事